

TOPICS
2トピックス…②
乳用牛の輸入頭数が急増

乳用牛の輸入頭数が昨年、平成17年以来、12年ぶりに2,000頭の大台を超えた。これは、国内の初妊牛価格が高水準で推移する中、割安な輸入牛への需要が高まった結果といえる。

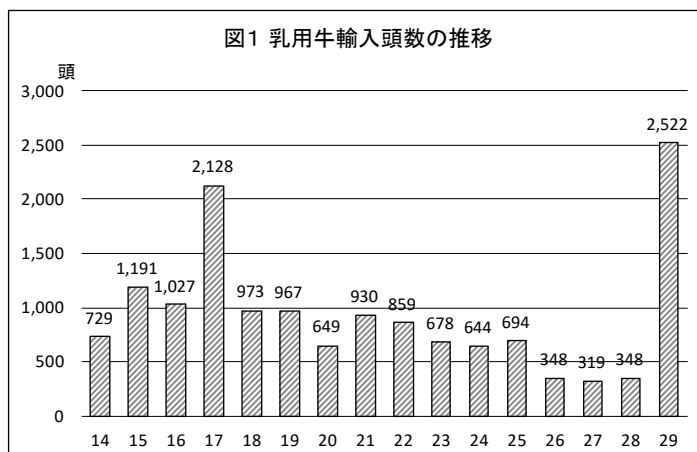
農林水産省「動物検疫統計」によると、平成29年における乳用繁殖用牛（以下、「乳用牛」という）の輸入頭数は2,522頭となった。図1をみると、平成17年に2,128頭と前年から倍増した乳用牛の年間輸入頭数は、翌年に半減し、その後は漸減傾向をたどり、平成26年からの3年間は300頭台に低迷していたことがわかる。乳用牛の輸入元をみると、平成15年までは米国産とカナダ産が輸入頭数の一部を占めていたが、それ以降は、平成22年のニュージーランド産の10頭を除くと、オーストラリア産が独占している。

なお、日本家畜輸出入協議会が作成した資料によると、平成29年に輸入された乳用牛2,522頭のうち166頭は血統登録牛であった。血統登録牛の輸入は、平成22年に165頭が実施されたものの、それ以降はほとんどみられなかった。

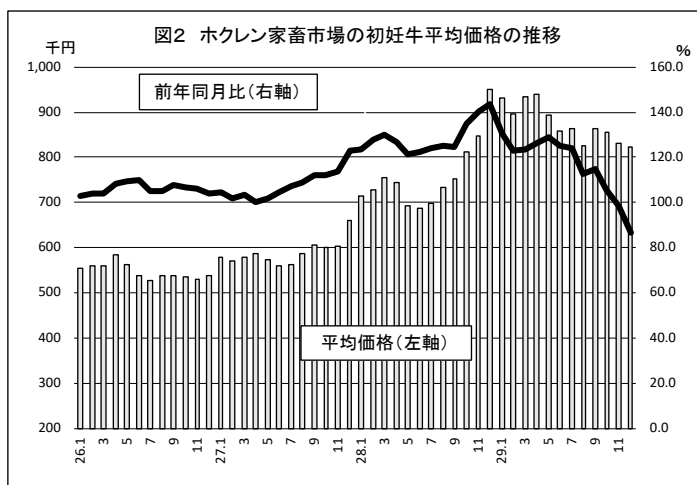
乳用牛の輸入頭数が急増した背景には、都府県を中心に搾乳後継牛不足が常態化し、乳用牛、とくに初妊牛の需給がひっ迫していることがある。そのような状況の中、生乳生産者が割安感のある輸入牛を調達する動きが活発化したと言えよう。図2には、ホクレン家畜市場における乳用初妊牛平均価格の推移を示した。平成28年12月の95万円をピークとして、上昇傾向から下降傾向に転じたものの、29年は1年間を通じて80万円以上の高価格が持続した。

ホクレン家畜市場における乳用初妊牛の出場頭数をみると、平成28年より29年の方が増加しており、取引価格が高水準を維持した要因としては、酪農経営、とくに経営規模拡大を指向する酪農経営の購買意欲が引き続き旺盛だったことが推察される（図3参照）。

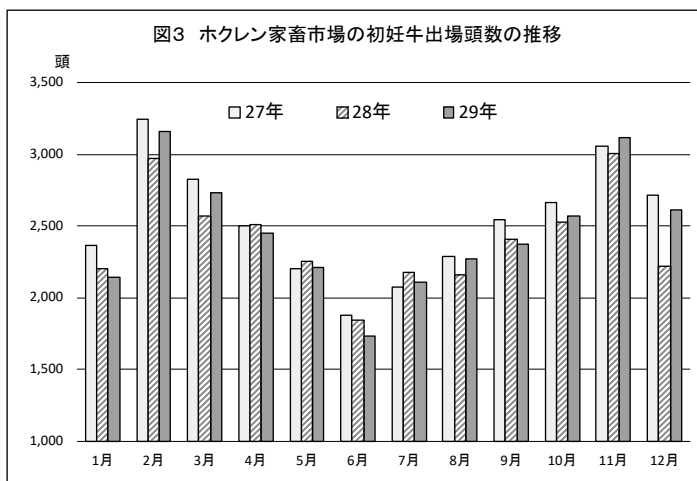
酪農生産基盤の強化を図ることを目的として、乳用牛を海外から輸入し供給するために要する費用の一部を補助するJミルクの輸入支援事業（乳用牛資源緊急確保事業）が、平成29年度から31年度までの3か年間にわたり実施されることになっている。平成29年における輸入頭数には、同事業を活用して輸入された頭数に加え、同事業に触発される形で、独自に輸入された頭数も多く含まれていると言われている。生乳生産量が伸び悩む中、同事業の直接、間接の効果により搾乳牛飼養頭数が増加することが期待されている。



資料：農林水産省「動物検疫統計」



資料：ホクレン家畜市場情報



資料：ホクレン家畜市場情報